

小ギクの適正仕立て本数の実証

～ 目指せ A 品率アップ！小ギク仕立て本数の適正化～

平松裕邦（東三河農業研究所花き研究室

前・新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【平成 29 年 7 月 26 日掲載】

【要約】

新城設楽地域の小ギク栽培において、適正な仕立て本数を調査した。切り花のボリュームがつきにくい「蒲赤」において、株当たりの仕立て本数を 4 本から 3 本に制限したところ、規格外品率が低下して出荷本数が増加するとともに、切り花品質が向上した。以上から、「蒲赤」では、株当たりの適正な仕立て本数は 3 本と考えられた。

1 はじめに

小ギク栽培において収益の向上を図るためには、面積当たりの総仕立て本数の適正化が重要である。仕立て本数が多すぎると、病害虫の多発や切り花重の低下により、出荷本数が減少する。しかし、新城設楽地域の小ギク産地では、高齢になってから栽培を開始した生産者が多く、品種及び系統ごとに定植方法や定植株数を変更することが難しい。そこで、当産地では、面積当たりの仕立て本数の調節のために、株当たりの適正な仕立て本数を検討する必要がある。

今回は、産地全体の出荷本数の増加や A 品率の向上を目的として、仕立て本数と切り花品質の関係を調査した。

2 調査区、栽培概要、調査方法

調査区は、株当たりの仕立て本数を 3 本（面積当たりの総仕立て本数：133.3本 / m²）とする「3 本区」と、4 本（面積当たりの総仕立て本数：177.8本 / m²）とする「慣行区」とした。

今回の調査には、産地で多く栽培している系統の「蒲赤」を使用した。「蒲赤」は、特に切り花にボリュームがつきにくく、A 品率が低下しやすい系統である。A 品とは、切り花を 75 cm に調整したときの重さが 35g 以上のものを指す。定植方法は、うね幅 60cm、通路幅 60cm、株間 10cm、条間 30cm の 2 条植えとした（図 1）。倒伏防止のため、1 マス 15cm のフラワーネットを使用した。定植は平成 28 年 4 月 4 日、摘心は 4 月 11 日、整枝は 5 月中旬から下旬にかけて実施した。

調査は、開花時の草丈、切り花重（75cm 調整重）、A 品率、1 m² 当たりの出荷本数とした。

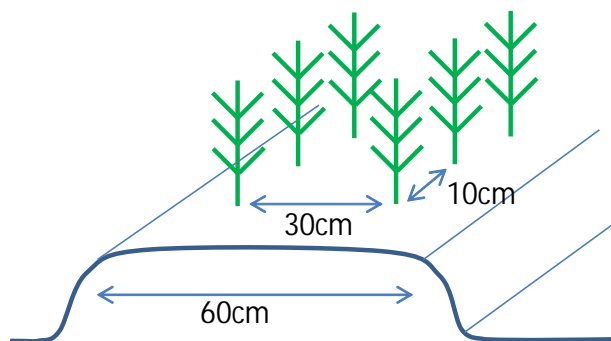


図 1 定植方法

3 結果

(1) 仕立て本数が切り花品質に及ぼす影響

草丈は、3本区の方が有意に長かったが、両区とも100cmを超えており、出荷には十分な長さがあった。3本区は慣行区に比べて、切り花重が13g重く、A品率は40ポイント高く、規格外品率は23ポイント低かった(表1)。

表1 「蒲赤」の株当たり仕立て本数別切り花品質の違い

仕立て本数	草丈	切り花重 ^{注1)}	A品率 ^{注2)}	B品率 ^{注3)}	規格外品率 ^{注4)}
	cm	g	%	%	%
3本区(3本/株)	104	42	80	13	6.7
慣行区(4本/株)	101	29	40	30	30
t検定	*	**			

注1) 切り花長を75cmとし、下葉20cmを脱葉した。

注2) 切り花重35g以上の割合

注3) 切り花重35g未満20g以上の割合

注4) 切り花重20g未満の割合(系統出荷できないもの)

草丈及び切り花調整重は、平均値。*は5%、**は1%水準で有意差があることを示す。

調査は各区から5株ずつ実施した。

切り花の外観は、3本区はボリュームがあり揃っていたが、慣行区ではボリュームの差が大きく、規格外品となるものが多かった(図2)。



3本区(3本/株)

慣行区(4本/株)

図2 3本区及び慣行区の切り花

(2) 仕立て本数が出荷本数に及ぼす影響

平均開花日はどちらの区も変わらなかった。面積当たりの総仕立て本数は3本区の方が慣行区より45本少ないが、出荷本数は3本区の方が慣行区より19本増加した。出荷ロス率は、3本区の方が慣行区より34ポイント低下した(表2)。

表2 区別出荷本数

	平均開花日	総仕立て本数	出荷本数 ^{注1)}	出荷ロス率
		本/m ²	本/m ²	%
3本区(3本/株)	7月26日	133	127	5.1
慣行区(4本/株)	7月26日	178	108	39

注1) 出荷本数は、3×11マス(0.74m²)を調査し、m²換算した。

4 まとめ（考察）

面積当たりの総仕立て本数は3本区の方が慣行区より45本少ないが、規格外品率が低下したことにより出荷本数が面積当たり19本増加した。また、A品率が著しく向上したことにより、販売額の向上も見込まれた。

出荷本数の増加及びA品率向上の要因として、3本区では、仕立て本数の制限により、群落内部まで均一に光が到達し、切り花の生育が揃ったためと推測された。慣行区における茎径のばらつきは目視で確認できるほど大きかったことから、「蒲赤」のように切り花のボリュームがつきにくい品種及び系統において揃った切り花を得るためには、均一に光が当たることが重要であると考えられた。

以上により、「蒲赤」を新城設楽地域において栽培する場合、株当たりの適正な仕立て本数は3本であり、3本に制限することにより出荷本数の増加と切り花品質の向上が可能と考えられた。